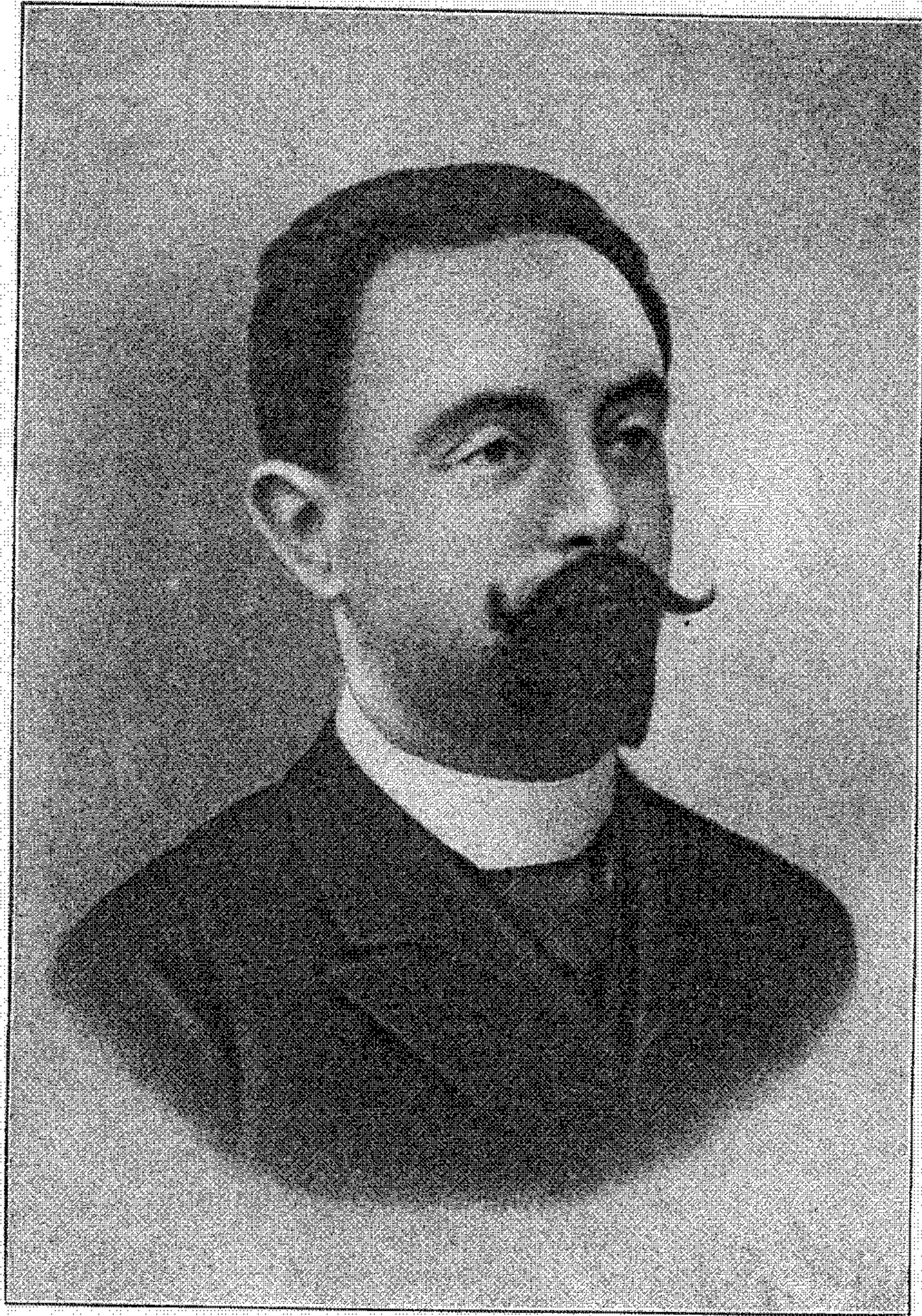


カルロ・ムニエル

Carlo Munier



### ムニエルについて

カルロ・ムニエルに就いて茲に改めて紹介の筆をとる事を敢てしない。薄命の偉人、ムニエルの崇高なる性格と高遠なる理想とを、認めていたどき度いために、而して又當時のマンドリンの爲に彼が如何に周囲の壓迫を受けつゝ戦つたかを知つていたどき度い爲に彼の説を轉載し、註を附する次第である。

## ムニエルの小論と之に對する世評と

武井守成註

千九百七年四月大ムニエルは雜誌「イル・コンチエルト」上に「コンサート樂器としてのマンドリン」と題する一文を發表した。當時の斯界に、此小論が如何に大なる動搖を興へたか。それは今日の眼を以てしては到底想像も及ばない。果せる哉、ムニエルは四方から攻撃をうけた。然し彼は深き信念の下に飽くまで戦を續けたのである。ムニエルは四年の後他界したが、彼の所論は今日に於て何等の矛盾をも認められない。要するにムニエルは勝者たり得たのである。彼の小論と、世の反對と、更に之に對する彼の辯駁とはマンドリン界に取つて忘るべからざる一大文字として殘されたものである。

る。先づ彼の「コンサート樂器としてのマンドリン」を御紹介する。

余及余の四部合奏團が參加した三月三日のフィレンツェに於ける慈善音樂會の後、新聞「フイエラモスカ」は次の記事を掲げた。

「多數人士の意見に従へばマンドリンはコンサート樂器と認められないが、然し此樂器が一度ムニエル教授の手に奏でられる時には特種の優婉さと繊麗さが現れ來るのである。而して此一事こそ彼の教課を益々多忙ならしめ、彼の門下生を益々多數ならしむるものである」と。

千九百五年五月八日夜、トリノ市カリニアーノ劇場に於て同じく慈善を目的とする音樂會が開かれ、余は自作「ロツシニアーナ」「ワルツエル・コンチエルト」及リストの原作にして余の編曲に成る「愛の夢」とを演奏したが、其際彼の權威ある「ラ・スタンバ」紙は次の文字を列ねた。

「勇敢なるマンドリニスト、ムニエル氏は、過去に於て大なる藝術的價値を認められざりし樂器を健全なる藝術の領域迄引揚げたる事によりて、多大にして誠實なる賞讃を蒙れり」。

斯くの如くして或は公の演奏會に、或は私人の音樂室に、或は都會に、或は小邑に、或は異國に、余は次の如き言を耳にするに到つたのである。……マンドリンはコンサート樂器ではないかも知れない。然し茲に貴下がある……と。恰も余は復活せる救世主の如く見られた。之は實に奇蹟である。「フイエラモスカ」紙の云へる如く「俗謡に合せられるマンドリン、無暗にかきならされるマンドリンは決してコンサート樂器ではない」唯「ラ・スタンバ」紙の「健全なる藝術の領域に引揚げられたるマンドリン」を考へなければ成らない。

余は彼の頑冥な聾者の耳にマンドリンの音調を徹底せしめんとする努力の爲には決して疲勞を覺えぬ事を信ずるものである。人生に起り來る幾多の争闘の一として  
は余はマンドリン藝術の爲にする争闘を自己の生存と聯想し、尙自ら進んで其争闘渦中に、恰バンに向つて進むが如く、然り眞實のバンに對する如く、突進を厭はぬものである。

今余は戰に使用すべき二つのペンをもつて居る。一はマンドリンの技術的方面に於けるペンにして他は理論的方面に於けるそれである。

茲に余はカルロ・トゥルコ氏（イル・コンチエルトの當時の主筆）の懇切なる招きに應じ第二のペンを握んでコンサート樂器としてのマンドリンの爲に辯明を試みんと欲するのである。

眞實を告白すれば、余自身すら最初マンドリンを大なる進歩を見得べき樂器とは信じなかつた爲に、或種の曲は演奏不可能なりとして手にも觸れず、中庸の程度の曲のみを自身のレパートリーに加へたのであつた。然し余は奮闘した。努力した。又考慮した。

そして練習曲、意想曲、二部曲、三部曲、四部曲、其他を作つた。寧ろ濫作したと云つてもよい。其結果として演奏家としての自らの地位を漸次に高める事に成功したのである。最初に不可能と信じた困難にさへ、漸次に打ち克つ事を得、最難曲と信じたものも敢て演奏不可能に非ずと考ふるに到つた。斯くして余はトリル、二線に亘るトレモロの運動、二重奏、三重奏、四重奏（所謂マンドリン・デュオと稱せらるゝものであつて一個のマンドリンを以てする重奏の意である）アルペジオ、ピッツィカート等の困難を征服し、最後にマンドリンの眞隨なるスタッカートの迅速さに打ち克つた。敢て云ふが吾人は光輝ある迅速さと「音符喰ひ」の混亂せる迅速さとの相違を記憶せねば成らない。

争鬭は余の作品の出版に對しても行はれた。最初の作品を提供するに際して、それ等は大なる難曲でなかつたに拘らず余は次の冷言を浴びた。「何と云ふのだ」「何うだ、これは」「此様なものが印刷され様か」「誰が買ふのだ」

而して散々に鞭うたれた憐れなマンドリンの殉難者は風笛を空しく袋に納めた儘悲嘆の涙をのんで引退つた。但し余は決して吃驚しはしなかつたのである。

「機會を待て」余は堅き決心を以て自ら斯う叫んだ。そして一層難曲を考へ、書いた。

今や、フイレンツエのマウツリ出版社はコンサート用の多くの曲を出版して居る。そしてその中には實際に技巧の難しい曲が尠からず含まれて居るのである。勝利は自ら明白である。

吾人は能ふ限り進まなければ成らない。勇氣をもたなければ成らない。マンドリンの爲の十字軍を興さなければ成らない。中世紀に於て吾人の祖先が鐵面と劍と甲冑とを以て身をかため、聖地の爲に奮闘した様に。

余は今日他の音楽雜誌上に「音楽學校内及び管絃樂内に於けるマンドリンとギター」と題して意見を披陳した。（後稿参照）之も亦大多數の人々の攻撃の目標となる

かも知れぬ。余の危険なる思想を以て遂に余自身を最後に導くのではあるまいか。然し、それも止むを得ない。余はマンドリンの勝利の爲に自らを甘んじて犠牲とするであらう。

千八百九十二年、デエノゾに開かれた第一回國際コンユルソ開催の折、余は名マンドリニストに對する最初の印象を得た。之こそ全伊太利に眞のマンドリン藝術を知らしむべき最初の光明であつたのである。吾人の半島國の總ての都市にマンドリン藝術の「力」は散布され、何人と雖、之を認めないものは無くなつた。デエノゾは實に第一の戰場を提供したのである。戦闘は激烈であつた。然し結局此時からマンドリンは一の眞面目な樂器として目され、諸人士から考究の的と成つた。

此コンユルソに於てローマのクルテイはサラサーテの「ファウスト」のファンタジアを、フイレンツエのピアンキはアラールの「ファウスト」を、ミラノのアルフイエーリはヴェータンの「ロマンツァ」を、そして余はト調の「第一司伴樂」をそ

れぞれ演奏した。此第一司伴樂こそ獨創的なコンサート樂曲としての第一の試みであつた。尙此際余自ら初めて組織した、プレットロ樂器の四部合奏團が余の第二の四部合奏曲（ニ長調）を演奏したのである。

余は多くのマンドリン名手の演奏をも聽く機會を得たが然し演奏されるものは常にヴァイオリン曲のみであつた。而も之は決して慶賀すべき事實ではない。マンドリンはコンチエルト用の曲として獨特のレパートリヲを持ち得べく、又持たねば成らぬものである。

余は全力を擧げて「獨奏者の曲庫」(Biblioteca del Solista)を編んだ。「マツルカ」「ザイツツアリア」「ワルツエル・コンチエルト」「第二マツルカ」「西班牙狂想曲」「第一變奏曲」「ロツシニエーナ」「第一司伴樂 (ト長調)」「舞踊の舞臺面」「愛の唄」等が其内に含まれて居る。此最後の「愛の唄」は眞の意味に於けるマンドリン曲であつて、一個のマンドリンに新らしき重奏形式を授けたものである。此曲

こそプレットロ樂器の獨奏曲に新たなる途を開いたものである事を信じて疑はな  
5。

マンドリン曲作家として優れた技能をもつ人にマルチエルリ、ラ・スカラ、レオ  
ナルデイ、カラチエ（以上伊太利）ファンタウツツイ、ベツテイネ、アプト（以  
上他國）其他二三の人が數へらる。而もマンドリン音樂の爲には作曲家の數はあま  
りに少數である。

全世界出版業者のカタログに載つて居るマンドリン曲の數は全く徹々たるもので  
ある。茲に於て總てのマンドリン獨奏者がヴァイオリン曲に走るのは或程度迄止む  
を得ぬ事に屬するのを思はせる。同時にヴァイオリン曲にしてマンドリンの演奏に  
適するものゝある事も考へなければ成らない。（但し適當の編曲を要するものは勿論  
ある）

ド・ベリオ作 「第七司伴樂」「第九司伴樂」「第一變奏曲」「第六變奏曲」「舞踊の舞

臺面」「ルチア幻想曲」（此人の曲は最マンドリンに適する）

アラートル作 「ファウスト幻想曲」「アラゴネーズ」「モゼの祈り」

ダンクラ作 「第八變奏曲」

ラマチヨツテイ「ラ・ロンデイネルラ」

ファヴァイツリ作 「タランテルラ」

以上の外、ボーム、クネイセル、ウイニアウスキト、モスコウスキト、ラツフ、  
バッツイーニ等の曲は若しマンドリンの充分なる智識を以て選定されるならば立派  
に演奏される可能性を豊にもつて居る。

卓越せるマンドリニスト、エルネスト・ロツコはバガニニーの司伴樂とバッツイ  
ーニの「フォレツテイの踊」とを美事に演奏した。然し重ねて云ふが之等のヴァイ  
オリン曲がマンドリン曲としての全部では決して無い。余は優れたる演奏家がすべ  
て卓越せる作家ならん事を望む。而して漸次にマンドリニストの曲庫を豊かならし



めん事を祈るものである。

而も演奏の技巧上に於て難曲に、眞の獨特の効果ある曲に、而して演奏會用の曲に、達せんと欲せば多年の練習を積まねば成らぬ。即ち今日他の所謂高等なる樂器の練習に於て考へられて居る事を直ちにマンドリンに對して考へなければ成らぬのである。

マンドリンは今日に於ては既に完成した樂器である。其構造はナポリのリウート製造家バスクワトレ・ヴィナツチアの改良に據つて演奏上に於けるすべての要求を満たされた。ヴィナツチアは今日の演奏會用マンドリンの創造者である。

マンドリン演奏上の教科書も亦最初歩の課程から最高等の技巧に到る迄を示したものが既に存在する。唯眞の、而して一般的の教授所のない事だけが遺憾である。此一事に關しては余が豫て主張せる如く國立音樂學校にマンドリン科を設置する事を希望して止まないものである。而して此事たる未來の名奏手の努力に俟つの外はな

5。

憐れなる樂器マンドリンは全く過去のものとなりつた。今や吾人は次の言を叫ぶに躊躇しないものである。

「マンドリンは一個の美事なるコンチエルト樂器である」。

カルロ・ムニエル（千九百七年三月、フイレンツエにて）

此小論を掲載した「イル・コンチエルト」の主筆カルロ・トゥルコは次の意見を添えて、此小論を討議の目標とした。

卓越せる教授、カルロ・ムニエル氏の一文を紹介し得たのは余の光榮とする處である。

然しムニエル教授は普通の獨奏者の一人ではなく、全く他と隔絶した地位に在る演奏家なるが故に其見地は普通人のそれと全く赴きを異にし通常一般の、若しくは

それ以下の手腕を有する人々の觀察に比すれば餘りに高踏的なのを恨みとする。

一般人は兒童がオカリナに對して有すると同程度の藝術的觀念を以てマンドリンを取扱つて居る。マンドリンの普通の彈奏者の目標は小ロマンズにあり、小ワルツにあり、小ポルカに在る。即ち一加線のA以上の高音をもたず、二つ以上のシャープ、或はフラットをもたぬ曲に限られて居るので重音などの高等技巧は問題に成らぬのである。

余はポロニアのデューゼ劇場に於けるマンドリニスト、ロツコの二夜に亘る演奏會を記憶して居る。其第一夜は僅に十五人の聽者をもつたに過ぎなかつたが演奏は驚嘆に値する出來で、聽者は熱心に聽き、大喝采を浴びせた。

余は獨り思つた「演奏者はロツコである。演奏はマンドリンに於ける極致である。タルテイーニの「惡魔の叫び」に明夜こそは滿員の盛況を見るであらう」と。

而も其翌夜のデューゼ劇場は廣々とした中に實に十二人の頭を數へ得たに過ぎなかつた。

つた。

吾々は野蠻人の中に居たのではない。ポロニアに在つたのである。而も此聽衆は果して何を語つたであらうか。「彼は神の如くに奏く。然しヴァイオリンを以て奏でられなかつたのは遺憾である。マンドリンは優しく軽い小曲にふさはしいもので要するに好事家の樂器である」と。

之が一般の状態である。然し余は眞の藝術的觀念を以て取扱はるゝ時にはマンドリンも難曲に於て大なる効果を擧げ得るものである事を信ずる。此點に於て余は全然ムニエル氏の説に賛意を表するものである。然しマンドリンを音樂學校乃至音樂院の教課目に加へんとする説に對しては疑懼の念なき能はずである。勿論眞の全きマンドリニストを得んとする爲には之が唯一の良策である事は余も亦首肯するが唯次の事を余はムニエル氏に問ひ度い。「彼等優れたるマンドリニストは其習得した技能と證書とを以て次に何をなさんとするか。」

論戦の幕は茲に開かれた。

要するにトゥルコはムニエルに反対し戦を宣したのである。此宣戦の布告に對しアンヂエロ・フイリオリーニと云ふヴァイオリニストは直ちに立つて反駁論を公にした。之も亦同誌上に掲げられたのである。

「論戦の幕は開かれた」、カルロ・ムニエル教授の小論に對して敬愛すべきカルロ・トゥルコ氏は斯う叫んで居る。之に就き余も亦賢明なるムニエル教授の論の重要な諸點に關し自己の意見を述ぶる事を敢てしたい。

「マンドリンはコンサート用の曲として獨特のレパトリーを持ち得べく又持たねば成らぬものである」ムニエル教授は斯う斷言し且つ演奏家が彼の廣大にして完全なるヴァイオリンのレパトリー中に入る事を許して居ない。余は多年のヴァイオリニストとし且つマンドリンの同好家として之に反對の意見を持つて居る者である。

マンドリンは云ふ迄もなくヴァイオリンの一つの模倣物として認められて居る。(之は其樂器の構造を知るものは直に了解するであらう)彼の四絃はヴァイオリンのそれと等しく、調子さへ全く同一に合せられる。

吾々はマンドリンに於てヴァイオリンのそれと等しい運指法とポジションとを有つて居る。勿論其音調に於て全く相違したものを互に有しては居るが然し要するにマンドリンの音樂は常にヴァイオリンのそれに平行するものである。

余は自らマンドリン獨奏家として演奏會場に出づる場合には概ねベリオ、パッツイーニ、バガニリーニ等の曲を選択した。而も若し之等の曲がヴァイオリンに於てよりも却つてマンドリンに於て演奏上容易なる事を時々發見した事實を忌憚なく述べたならばムニエル教授は如何にして之に答ふるか。

只一つ如何にしてもマンドリンを以て演出し得ない事がある。それは即ちハーモニック音である。然し其却りマンドリンは二絃三絃、或は四絃に亘る演奏を容易ならしめて居る。而も之はヴァイオリンに於て困難事に數へられる。同時にヴァイオリンが有たないタスト（フレット）なるものを有する爲に絃を押へる事が確實で結局重音三重音等の演奏に於ける音調をも確實ならしむる利をもつて居る。

以上の事實よりして、余は若し眞の演奏家（其九割迄はすべてヴァイオリニストである）が自らの位置を向上せしめんと計るならば、述の如き傑出した曲を選ぶ外なき事を斷言するを憚らない。且又實際に於て今日のすべてのマンドリン作曲はムニエル教授の「ラ・スクオーラ」（教則本）の如き例外を除いては皆ヴァイオリンのそれと平行して歩みつゝあるものである。

斯かる故にマンドリン演奏家がヴァイオリンのレパトリーに走る事はヴァイオリン曲に優に敵對し得るマンドリン曲の絶對的缺乏を見て居る間は寧ろ當然の事である

あると考へる。

「マンドリンの教科書も亦最初歩の課程から最高等の技巧に到る迄を示したものが既に立派に存在して居る」とムニエル教授は論斷せられたが余は此論斷を稍々危険視するものである。何となれば最近二十年間に相繼いで公にされたマンドリン教科書はムニエル教授及プランツオリ氏のそれを除き大部分は著者の自畫自賛を以て勝手に記されたもので寧ろマンドリン教科書として容認し得ざる底のものである。是れムニエル教授の想到せざる處で茲に改善、而も嚴格なる改善を要するのである。

第一頁に於て内容の優秀を豫期せしめ乍ら第二頁に移つて直にワルツ、ポルカを見出さしむる教科書の往々にして存在するは正に一種の皮肉である。

余は敢て問ふ。マンドリンが一の低級樂器として認めらるゝ事を如何にして拒み得るか。ムニエル教授！余も亦久しき間マンドリンを他の樂器と同一水平線上に持

ち來らしむ可く努力し尙且努力しつゝあるものであるが如何せん其缺陷は正に其ネツクに在る事を思はせる。余等は相共に「改善」を叫ばなければ成らない。

此樂器の爲に奮闘しつゝある第一人者たるムニエル教授「マンドリンの王として呼ばれつゝあるムニエル教授」其所謂「小數なれども眞のマンドリン演奏家」を集め、貴下の權威ある言辭を以て彼等が教則本、ソナタ、コンチエルト等を作り出す様刺戟を與へられよ。良結果を得る爲に今は決して遅くない事を余は信ずるものである……。

音樂學校に於てマンドリンを教授する事の是非に就いては論議の餘地を認めない。敢てマンドリンに限らず今少しく確實な且有利な樂器に對してさへ誰が數年を費して習ばんとするか。假令教授を受くる迄も嚴重な試験を経て免狀を得た者が其後に於て何をなさんとするか。

目的に於ては余も亦ムニエル教授のそれと同一なる事を信ずる。即免狀を得たマンドリニストは更に之を後進に傳へんとする。彼等自身は今日多く見られる「樂器かきならし」でなく眞のマンドリニストと成る。理想は正に斯うであるが果してそれは現實となり得るか。

之に呼應して「イル・コンチエルト」の寄書家の一人、ヴェー・スコンツォは「好機會に臨みて」と題して次の一文を公にした。實にムニエルは四面に楚歌を聞いたのである。

余の古いフリエートの教師は眞に驚くべきギター演奏手であつた。彼には難曲と云ふものが無い様に見えた。彼の兩手にもたれる時ギターは魔の樂器であるかの如く思はれた。彼の數多のコンサート、それはすべて慈善を目的とするものであつたが、に於て彼は屢々自分の「前奏曲」を演奏した之は非常な難曲であるが彼は驚くべき精密と明確と表情とを以て奏でた。人々は彼の手にもつた樂器が果して眞のギターであるかどうかを疑はしく思ふ程卓越した彈奏振を示した。

或時彼は貴賓の臨場せられた演奏會で例の如く演奏を行つたが其際藝術愛護者を以て知られた或皇族は彼の技を嘆賞して止まず一個の最美事なギターを彼に與へた。之は彼にとつて至大な名譽であつたが只其皇族の妃殿下が彼に向つて「何故演奏にプレクトラム（ピツク）を用ひないか」と下問されるに到つて彼の面色は忽ち蒼白と成り口を聞く事さへ出来なくなつた。やがて彼が自分の家に歸るや否や手にした贈物のギターを壁にたゝきつけて斯う叫んだ。「獸もの、馬鹿！お前達に何が判るか、ギターをもつのに下らないマンドリンをもつ量見で掛つて居る大馬鹿者」と。そして此日以後は絶対に公の場所で演奏しなくなつた。

其頃から既に多くの年を経た今日、ムニエル教授は一般を敵とする戰場に立つた。そして無謀にも音樂學校に於て何故此樂器の課程を置かないかと叫んで居る。ムニエル教授は凡そ世の中の人々が如何にして生存するものであるかを考へる必要がある。生活の保障と云ふ事を熟考して貰ひたい。

勿論人の意見を尊重する事は吾々の義務である。そして特にそれが多年の嚴格な修養の結果であるならば、即ち余の教師のギターに於けるが如く、ムニエル教授のマンドリンに於けるが如き場合に於てはさうであらねば成らぬ。

然し同時に又大なる感情家であり、自己の意思に對する絶対の服従者である予等は多年に亘る苦業と大なる犠牲に忍耐し馴れた結果としてすべてのものを「眞實」てふ鏡を通して見なければ満足し難いのである。

予はギターの友としマンドリンの友としてムニエル教授の冒險的な觀察に論議をなさうとは考へないが只同教授がすべてのものは自己の能力の限界を有する事に注意してマンドリンの眞の能力を熟慮せられる事を衷心より希望して止まぬものである。

茲に於てムニエルは之等の敵に向つて次の如き反駁を行つた。「マンドリンと將來」と題して居るが、勿論反論である。

余の小論「コンサート楽器としてのマンドリン」がトゥルコ、フィリオリーニ、スコッツォ諸氏に依つて結局余の意見と一致し難い點に於て反對を蒙つた。反駁は人々の任意であると同時に總べての物の現状に就いてのそれは正しいものである。然し余は反對をなさざるを得ない。「眞實」は何れの處に在つても決して影を隠すものではない。而して余の意見の眞意は實にマンドリンの將來に在つたのである。

余は最初先づトゥルコ氏に答へたい。

余の提言の一つたる国立音樂學校にマンドリン科を設置する希望に對しトゥルコ氏は「彼等、優れたるマンドリニストは其習得したる技能と證書とを以て次に何をなさんとするか」と反問せられた。余は此質問に對しマルセイユのファンタウツツイ氏の言を以て答へんとする。此ファンタウツツイの言は余の小論發表後、又彼が巴里に一の重要な演奏會を開催して歸つた後、余に致されたものである。

「將來に於て優れたマンドリニストが爲さんとするは何か？ 今日なしつゝある以

上に何事もない。只マンドリンが先づ劇場の名指揮者から眞摯に取扱はれ、次ぎに一般から眞面目に認められた後マンドリニスト達が正當なる尊敬を受ける様に成るだけである。トゥルコ氏の所謂金錢上の問題の如きは第二の問題に外ならない。何となれば斯くの如き場合、生存上の争鬭の如きは全く考の外に置く事を至當と信ずる故である。余は次の如き實例を知つて居る。或家族が其息子達をピアノとヴァイオリンの大音樂家たらしめんとして莫大な修業費を投じた後、此息子達は生活上の問題からカフェーやバーに行つて僅々六七リラの金を得るの餘儀なきに立到つた。之は決して彼等の夢想だにしなかつた所である。即ち余の見地を以てすればトゥルコ氏の所謂生活上の保障の如きはムニエル氏の眞に藝術的な問題に對しては之を暫く排するのが當然であらうと考へるのである。

マンドリン及ギターを国立音樂學校に於て教授すべき事、及びプレクトラム楽器（マンドリン系の樂器）の四部合奏を普通のオーケストラに合體すべき事は余をして

忌憚なく云はしむれば自然以上の自然である。大モツアルトを初めとして最近の作曲家シオルダノ氏に到る迄マンドリンを一つの全く特異の價値を存する樂器として有効に用ひて居る彼のバッハ、嚴格なる彼れバッハさへ彼のオラトリオの内にリウートを用ひ、更にヴェルディもマスネもプレクトラム四部合奏を決して排斥しなかつたのである。よし彼等のすべてがマンドリンの眞價は認め得なかつたにせよ、其特性は立派に認めて居たに違ひない。最藝術的な演奏の後にプレクトラム四部合奏について考へられなさるべきものは何であるか？種々の四部合奏が生れ來つた今日オーケストラは此美事なプレクトラム四部合奏をそれに結びつけなければ成らな  
し。

彈絃樂器にして今日も作曲家等から一樣に重大視されて居るものが一つある。それはハープである。而も余の見地よりすれば充分なる効果を充分に満足せしむる迄には距離が決して短しとしないのである。若しもハープのアルペツジョの完全とコ

ード及ピッツィカートの明瞭とに加ふるに我プレクトラム樂器を以てするならば其音色の優越は勿論如何に美事な効果がオーケストラに現れ來るであらうか。ヴァイオリン系の樂器のトレモロ（それは模倣であつて眞のトレモロでない）のすべての効果が二つのマンドリンとマンドロンチエロとの四部合奏に現はれる效果に全然近寄り得ない事は明瞭である。

今より後何時かの好機に於て之等の樂器が有效なる協同物としてオーケストラ中に加へられ、国立音樂學校中の正課に置かるゝ時、優れたる奏手は多少共今日の他の樂器の奏手が今日認めらるゝ程度に於て認めらるゝに到るであらう。

余は更に云ひたい。今日国立音樂學校にはコントラバス、ファゴット、フリユート其他オーケストラ内に於ける一樂器としての效果以外、マンドリン若しくはギターがもつて居る家庭用及演奏會用としての特性と美點とをもつて居ないものが教へられる。之は眞實でなからうか。余の觀察が果して誤つて居るかどうかをトウルコ



氏に問ひたい。

余は更にファイオリオーニ氏に答へたい。それより曩き先づ同氏が余に贈られたるマンドリンのコンサート用曲に就いて感謝の意を表す。同氏は余の「マンドリンはコンサート用の曲として獨特のレパートリーを持ち得べく又持たねば成らぬものである」なる提言を不當とされた。余は構造上、演奏法上に於けるヴァイオリンとマンドリンとの類似點を新に同氏から教へられた。一つのヴァイオリン曲の或部分に於てヴァイオリンをもつてするよりもマンドリンをもつてする方が容易なる事を發見された旨をも併せ教へられた。之を余は否定しない。只余の一言せんとする處は既に余の述べたる通りヴァイオリン曲中マンドリン曲として適當なものは決して尠くないのであるが、最注意すべきは「適合」「模倣」は「獨創」でないと言ふ事である。例へ假に左手の運用が兩者に於て等しとするも右手に到つては全く別箇に考へるの外はない。ファイオリオーニ氏自身すらマンドリンに於けるハーモニック音の

演出不能とヴァイオリンに於ける三重音四重音の演出不能とを説いて居るではないか。此事よりして此兩者の相違は最明瞭であり、一つの樂器の性に適した獨創的樂曲の重要も明に認められるのである。

假に最優れた技能を有するマンドリニストが一生をヴァイオリン難曲の研究に費すとしても其の結果は決してヴァイオリンを以てするに及ばぬであらう。其の對抗は常にマンドリニストの敗に歸するであらう。

フアンタウツツイ氏は自己の主宰する雜誌「ル・プレクトル」に於てエルネスト・ロツコ氏に一意見を呈した。

「マンドリンはヴァイオリンに於てすると異り第八、第九ポジションに於て明瞭なる音調を而も強音に出す事が困難である。ハーモニック音亦さうである。如何に努力するともヴァイオリン曲の演奏はヴァイオリン其物を以てするより適するはない譯である」と。

マンドリン曲作家の不足は余の良く知る處であり又現に自ら述べた處である。只其現出が遠き將來の事であるとは如何にして信じ得るか。最獨創的なマンドリン曲あるに拘らずバガニロニ、ヴェイタン、サラサテの曲のみを選ぶの必要は奈邊に存するか。フイリオロニ氏自身の作に成る曩きの曲が一つのコンチエルト、一つのポロネーズ、一つのチンガレスの模倣より遙にマンドリンに適せずと思考するのであらうか。獨創的な情緒と構想とを有するものが「模倣」の下風に立たねば成らぬのであらうか。

余の「マンドリンの教科書」も亦最初歩の課程から最高等の技巧に到る迄を示したものが既に立派に存在して居る」の主張は「余の教科書」の文字を自ら避けたに外ならない事を改めて提言する。同時はフイリオロニ氏は此教科書に加ふるに次の如き諸種の教科書及練習書の出版せられたる事を恐らくは承知されざるものであらうと考へ此機會に於て之を同氏に告げたいと思ふのである。

全技巧に亘る教科書(二部)

旋律的及漸進的二十練習曲集(教科書補足)

ロ・シヨリディタ(練習書) (四部)

ウティレ・ドウルチ(二部合奏練習書) (四部)

十二カブリツチ

歌曲、主題、及替手曲

大練習曲書

之等の書は千八百六十八年、トリノ市に於ける大博覽會に賞牌と賞状とを授けられ既に孰れも第十版を超えて居る。余は之を以て好例を擧げ得たものと信じ更に同一目的に向つて進まんとする作曲家に對して多少なりとも貢獻する處があつたと考へて居る。

單なる試験其物が何の役にも立たぬと云ふ迄も無い事である。只「マンドリンの

家」が必要なのである。「堅實なマンドリンの殿堂」が慾求せられるのである。更に換言すればマンドリンに於ける藝術上の保證機關を希望するのである。此點に於て國立音樂學校にマンドリン科を設置する事を提言したに外ならない。

余は曾て自力を以てフイレンツェに學校を設立し、諸種の分科、試験、證書を以て自己の信ずる處を行ひ來つたが維持費の不足の爲に遂にすべては水泡に歸した。ブエノス・アイレスに於てはヴェルデイ音樂院の中に完全なマンドリン學校が設けられウベルト・ネ氏の賢明な指導の下に美事に目的を遂行しつゝある際、伊太利に於て何等之等に就いて考慮せられざるは如何なる理由に基づくのであらうか。

マンドリン藝術の發達に關して努力すべき事に就いては氏の意見も結局余の意見と同一路にある事を感じる。余は従來も行ひつゝあつた通り將來に於ても益々之が進歩發達の爲に努力すべきを改めて茲に宣言する次第である。

スコット氏はギター教師の逸話を齎して意見を發表せられた。氏は「マンドリン重要點の眞の限界は奈邊に存するか」と質問せられたが此答は既にトゥルコ氏及フイリオリーニ氏になしたる辯明中に含まれて居るから茲に再び之を繰返したくない。只同氏は「境界」なる文字を與へられたがマンドリニズムが一つの藝術である以上「境界」を有する事はない筈である。藝術の限界は無限である。最堅固なる希望を有する人々は眠れる人々を非難する。然し果して何日其希望は光明を見だす事であらう。

光明！眞實！優越！！余はマンツオツテイの傑作「マレンコ」の有名なフィナーレの響を聞く心地がするのである。

フイレンツェにて カルロ・ムニエル

扱斯くしてムニエルと當時の音樂家等との戦は一先づ終了したのであるが、茲に振返つて聊卑見を呈して置き度い。フイリオリーニはマンドリンの眞價を悟つて居ない。ヴァイオリンの従者、即マンド

リン」と云ふ觀察である。然しながら當時の音樂家としては之は當然の觀察であると云つてよい。幾年を経た今日でさへ、尙且マンドリンを低級視する人達が數多く存在するではないか。とは云へ彼がムニエルの稿を熟讀せずに感情的に反駁した跡のあるのは無責任である。と云はねば成らない。彼はムニエルが恰「ヴァイオリンのレバトリの中に入る事を許さぬ」と云つたかの如き口吻を洩らした。「ヴァイオリン曲にしてマンドリンの演奏に最適するもの、存在する事をも考へなければ成らぬ」と云つたムニエルの言を看過して仕舞つて居る。「ヴァイオリンの一つの模倣物である」と云つたフィリオリニの言は萬事を語るものである。構造論の如き今日から見ればたわ言に過ぎない。而して最重要な兩樂器の音性の相違の如きが事もなく取扱はれて居るのは滑稽である。彼は又マンドリンのネ

ツクの缺陷を唯一の理由として此樂器を低級視した。而も其缺陷が如何なる點に如何に存在するかさへ明にして居ない。要するに彼の意見はあまりに薄弱な基礎の上に立てられて居る事を遺憾に思はずには居られない。スコツオに至つてはムニエルを皮肉に揶揄しやうとしたに外ならない。フィリオリニよりも寧ろ伶俐で小賢しいが論の内容は空虚である。之に對するムニエルの駁論は正當ではあるが、力が足りない。彼にも亦彼自身の理想が果して實現し得るや否やを確信するに些少の間隙があつたからであらう。然し彼は今日に於て立派な勝者である。恐らくは彼自身も想倒せざりし程の立派なレバトリをマンドリンはもつた。マンドリンをヴァイオリンの模倣物視する時代は遙に過ぎ去つた。マンドリンを低級樂器と叫ぶものは尙あらう。然しながら、實證を擧げて堂々正面から攻撃し

得るものが果して存在するであらうか。若し之を敢てし得るものがあれば吾々が新らしく「論戦の幕」を開き度いものである。

## 管絃樂内及國立音樂學校内に於ける

マンドリン・ギター

武井守成註

千九百六年六月、三日間に亘つてモナコ公國に開かれた國際コンコ  
ルスはモナコ公の保護の下にあるエストウデアンテイナ・モネガ  
スクの主催にかゝり、サンサエンズとマスネーとを名譽審査員と  
し、高級官吏のすべてを委員とした極めて大規模なものであつた。  
ムニエルは伊太利側の審査員に選ばれて此大會に臨んだ。茲に記す  
ものは彼が或宴會席上に於てなした演説の要旨である。

余はマンドリンと其眞に藝術的なる意味に於ける將來とに就いて敢えて一言を呈

したい。

今や余等は大きな自信と熱誠とを以て熟慮すべき二問題を控えて居る。而して其第一は實に管絃樂内に於けるマンドリンに外ならない。

今日のマンドリンには昔の野外に於ける夜の樂器、而も玩具に近い單純な樂器として認むべき時代は遙かに過ぎ去つた。従つてマンドリニストは此樂器の音樂に關し眞摯なる考慮を回らしつゝある筈である。

余はマンドリン音樂が數年前よりして異常の進歩發達を遂げた事を斷言する事が出来る。一つのプレクトラム四部合奏(マンドリン系樂器の四部合奏)はトレモロとピッツィカートとの最優秀なる效果を示した。而して之は他の樂器の到底企及し能はざる底のものである。

管絃樂は此新たなる四部合奏樂器によつて新しき富を加へ、作曲家は之を用ふる事に依りて新奇にして且特種の效果を生ぜしめ得るであらう。管絃樂は常に新しき

樂器の現出に注意を怠らぬに拘らず何故にプレクトラム四部合奏樂器を其中に加ふる事に對して斯くも冷淡なのであらうか。

第二の問題に就いては特に識者の注意を促したい。それはマンドリン音樂の研究機關に關するものである。

マンドリンは未だ曾て音樂學校の教授課程中に見出されない。之は何故であらうか。マンドリンは既に完全なる教科書を有して居る。若し余をして信ずる處を叫ばしむるならば——而して潜越なる余の言を許容せらるゝならば、余は敢へて余が多なる勞力を費し、長期間の練習と經驗との後に造り上げたる「スクオーラ・コムプレータ」を指示するに躊躇しないのである。

今や此教科書は一般に發表せられたが而も單に其名を公にする爲にされて來たとすればそれは餘りに悲慘である。余は國立音樂學校にマンドリン科が新設せらるゝ事を衷心より望んで止まない。他の樂器に對するに同様の教授をマンドリンに對し

て行はるゝ事を切望するものである。而して若し此説にして實際に容れらるゝならばマンドリンは必ず眞に藝術的なる効果を更に一層顯著に擧げ得る事を信じて疑はなす。

余は伊太利に於て屢々如上の主張をなしたが而も悲しむ可し、遂に今日迄余の説は容れられなかつたのである。若しも佛蘭西が此所謂冒險的な企圖を實際に行ふ勇氣を有するならば余は佛蘭西の爲に、且又道徳上、政治上、藝術上の總べてに就いて有する彼の賢明なる天性の爲に祝福したいと思ふ。同時にマンドリンの爲にも亦祝杯を擧げるであらう。

マンドリンに就いて余の主張したる處はギターの爲にも同様に主張すべきものである。ギターは古の大家の残したる幾多の優れたる作品を擁して居る。而して之は今日の何人と雖も之に對して全然尊敬を拂ふべきである。

モナコは余に多大の歡喜と好感とを與へ、爲に余をして余の夢想が或は早晚實現

せられ得可きやを想はしむるに到つた。即ち佛蘭西に於てマンドリンとギターとが國立音樂學校及管絃樂中に位置を占むる事近きにあるを感じたのである。

世の多幸なる音樂上の同胞よ。幸ひに余の夢をして現實ならしめん事を。

カ ル ロ ・ ム ニ エ ル

ムニエルはフイレンツェにマンドリンを中心とする音樂學校を建設したが、經濟的に失敗した。若し彼が今少しく財政上に恵まれて居たならば、彼は更に大なる事業をなし遂げたであらう。ムニエルの説いた所は今にして之を願れば些の矛盾も見出せない。國立音樂學校内に於けるマンドリン科については既に佛、希、西等の國々によつて實施されて居る。ムニエルも恐らくは地下にあつて微笑を禁じ得ぬであらう。